

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

五 號

# 乾 杯 群

草野心平・私と私の蛙

三野混沌・新

中野勇雄・象

楠田重子・春のひと日

景 田

段塚青一・私の小猫  
小林直人・展  
望

平町・乾杯群社

## 私ご私の蛙

草野心平

寒いね  
もつこつちに寄らないか  
月があるさるかい

冬・口笛  
ふるひながら一点をゆり上げてつて

一圓錐形なる空

## 新田

おなじ煙のなつばを  
みんなでたべ  
その一きれのなつばでおれは

性盡だ  
おう

ひごつ烟だ

地べたにひつけられた  
その面がいゝ  
すなほな。

## 象景

中野勇雄

深夜 推積した雪の影 ゆれ崩れ  
犬は狂狽な灯射す三味の音に憑かれて走る

## 晏天五篇

梢さんがら  
みるみる太くなる——骸

鏡の中で自分の顔を見失ふ

電線を傳つて

獸性——  
びくびく びくびく

皿いちめんの糊である

火のない火鉢——  
灰がうごいてゐる

## 春のひと日

楠田重子

細胞は  
尖り——尖りなりに  
いくらでも睡眠がほしい  
じつこり汗ばむ視線は  
流壩の隅々や  
滯つた泥溝の中をはじくりたがる

## 坂・だんだら斜光・飛沫を食ひ——

深夜 青銅の微に呻される時計  
ほんぱり燃ゑ崩れ 金ベニはじめ  
さくさくさくさくさくさくさく

銭あり 犬は水つて標札となる  
白亞石・

瞳・褐色のカーテン垂れ  
さくさくさくさくさくさくさくさく

さくさく 白狐の毛並を——撫でる

戀人よ

石のやうにこだわつた情緒にひきづられて  
あなたへの戀心はもうタンボボの毛となり  
秋風よ流されて行つて了つた  
茫漠——こした地球の裏側の昨日よ  
演車が野原の樂器を奏でる刻々 垂れ下つた雲を  
たぐつてゐる山々に眼を投げ——  
私は鳥か 一本の枯木か それとも吐出された白銅  
の月か  
——あなたは廢捨場の跋行豚か  
漠漠漠と泣き膨れた純情の毛蟲は  
穴のあいた南京袋に巣をくつて了つたのだ  
戀人よ——

## 私の小猫

段塚青一

温上りの爪をつんでゐるご  
金柑のやうな寂しさが湧くものだ  
ニッケル鍍金の鍼の音が  
餘りにいゝので  
私の小猫は  
今夜もおとなしく  
私の側にちつと黙つて坐つてゐる

## 展望（郊外設計圖）

小林直人

### ●後記●

乾杯群

空友情

五号活版

電氣廣告

手よ

チユーリップ的追想「空間の重み」の直徑

「かうも月に怖ゆるのは」銀期四号の廣告

編輯同人 小林直人 中野勇雄

●●●受贈誌●●●

翁行燈觀 イルイス イム 詩世纪 原羅針 詩潮 現示 戎克船

彼等自身 亞頗頗 津田天野路旁詩詩家（八木氏より）

蒼鶻のいめゑじが春の展望の丘を登ると空想の合金を塗つてゐる西洋草花だ

練蘭磨き羅紗帽を並べた休息台は鉄橋が女になつていゝころがある

ふりじあが都會の裏通りを追ひかけるので黒色れもんていの散策をうれしがる展望の幼兒になる

郊外よ吊るされた森林の露台はばれつこの電車で

錆びた青草の酸化炭素で液化人形のやうでもある

（たいへん美しい蝶の脚飾りなので 女はふんふんとあこを踏いて行つたのです で女はたうとうあの湖の濃青の心臓を盜んで終つたのです

めらんこりあはあの湖の呪ひが化石した鳥なのです

でも自動車は毎日あの草原で朝餐を喫して大笑ひを

してぼるかのれでい達を待つてゐますよ

大正十五年四月一日

福島縣平町二丁目三〇  
編輯者 中野勇雄  
福島縣平町一丁目

印刷所 高瀬活版所

（頃價5錢）